

えられるに当り、当時を回想して感無量である。尚老齢とは申し上げられない先生には、今後の一層の御活躍を期待する次第である。

地理学教室人名考 日本 の 風 土

正 井 泰 夫

私がお茶大地理学科へ勤め始めたのは、昭和39年7月のことだった。当時は、渡辺光・松井勇・浅海重夫・式正英諸先生と貝山久子・岡崎セツ子のお2人の助手から教職員組織が成り立っていた。それに私が加わったわけであるが、もうこれだけでも、人名における混乱が起ったのである。いうまでもなく、マツイ・アサミ・マサイという名が混乱の基であった。

ある時、今は亡きスイスのベッシュ先生から手紙がきた。先生と私は、それより10年以上も前に秩父の山へ案内させていただいたり、また、その5年ほど前にアメリカでお会いしたことがあったのであるが、何とその手紙の中に、私を戦前からお知りであった、しかも計量地理学的手法の面である。いうまでもなく、松井先生と「光栄にも」間違えていただいたのであった。

その後、浅井辰郎先生が来学され、人名混乱がますます加わった。何しろ、人文地理学講座がマツイ・マサイ、自然地理学講座がアサイ・アサミであり、地誌学講座のみ、ワタナベ・シキという明瞭に識別できる組合せだったのである。マツイ・アサイ・アサミ・マサイは、特に電話の応対の場合に混同が多く、たくさんの方が困ったはずである。

これら4人の姓名は、漢字で書いても、共通点が多い。4人中3人は「井」をもち、2人は「浅」をもっていたからである。ローマ字にすると、もっとややこしい。Matsui, Asai, Asami, Masaiは、Maで始まるのが2人、Aで始まるのが2人、iで終るのは全員、最初のシラブルの母音は全員がa、さらに全員がsを含み、また3人がmを含むといった類いである。ベッシュ先生が間違えられたのも無理はない。

浅井先生は地名（アイスランド地名）を研究されているが、私も関心をもっている。日本人の姓名が地名と密接な関係にあることはよく知られている。考えてみると、渡辺・式両先生の姓を別とすると、松井・浅井・浅海・正井、それに貝山という姓は、すべて自然に直接に関連している。しかも、現代日本語で誰にでもすぐ分る意味を示しているのであり、日本人の姓名の研究によって、日本の風土の一端を明らかにすることができるだろう。

話を本題に戻そう。渡辺先生が退官されてから、内藤博夫先生がこられた。しかし、例の4人の混乱名はそのままである。そして、今度は松井先生が退官されたが、次にこられたのが斎藤功先生である。内藤・斎藤、何と似ていることか。片仮名でナイトウ・サイトウと書いてみると、もっとよく似ている。私が昭和50年中に転勤した後こられたのは、井内昇先生である。正に尻とりゲームのように「井」が両者についている。「井」は、現在は井戸という意味に解されているが、もともとは泉という意味であった。井だけでなく、川・河・池・泉・津・沢・田のように、自然の水と直接関連した姓名は非常に多い。地名も同様である。これは、日本が水に恵まれているからなのだろうか。砂漠地域

ではどんな地名・人名がよく使われているのだろうか。山など全くない大陸的スケールの大平原でも、山に関連した地名がたくさんあるのだろうか。夢はどこまでも広がるようである。

浅井さんを思う

柴田孝夫

浅井さんにはじめて会ったのは昭和11年の春。満州事変から4、5年の後で日本もそろそろ国際的緊張の中にあっただが、われわれの学生生活はまだそれほどさし迫ってはいなかった。当時の京都帝国大学では文学部の史学科の中に地理学専攻があったが、入学当初は専攻がきまらず、たゞ史学科の学生であった。私などは京都や奈良の風物が珍らしく、花に祭にうかれ歩いていた日々であったが、浅井さんははじめから地理学専攻の意志がかたかった。つまり地理学専攻のために京都の史学科に入学されていたのである。一年生のうちから暇あれば理学部の滑川教授のもとで気象の観測をされていた。ゾンデの気球を上げてその発信音を聞きつゝ比叡山のかなたに流れ行く気球の話をする時の君の目は輝いていた。他日京都出身の数少ない自然地理学者になられたのも既にこの時に芽生えていたと今になって思うのである。浅井さんの計測の確かさは地質学の中村新太郎先生の巡検の時の傾斜や走行の測定、歩測による地図の作成などにもあらわれていた。四年生の夏、内蒙古の探険隊に加われ調査にその成果があげられたが、つゞいて卒業後満州の建国大学に赴任され気候の研究が進められた。惜しくも敗戦を迎え中断されたのは残念である。浅井さんはそのまゝシベリヤに転送され森林の伐採に従事され、われわれ同級生は君の健康を気づかったが二年後に帰国された。君は意気軒昂であった。先の内蒙古の探険から帰られた時ひどくやせられていたが日ならずして元の豊満な怡幅にもどられた。この体力の強靱さは資源研時代の水温調査のための大井川の茂下りなどにもよく役立ったと思う。あらゆる困難さをのりこえて自身の学究を育てゝ来られたがその素質とその態度を伺い知るために一例をのべよう。

法政大学の時代に一年間、アイスランドの調査に従事された。その滞在中に一通の手紙が届いた。あけてみると謄写印刷であってあちこちがインキでよごれていたが判読出来た。調査の報告の他に印刷法が記されてあった。ビニールの風呂敷の上に印刷インキを塗ってそれに厚紙をおく。次に紙をのせて上から手でたゞく、とあった。アイスランドで謄写版印刷をした浅井さんの当意即妙と合理主義に敬服した。あとで聞くとところによるとアイロンの裏で肉を焼いて食べられたとか。

学生の頃、小山のお宅にお邪魔をしたことがある。部屋にピアノがあってお父様とお母様それに妹御様達が寄ってどなたかがヴィオリンを弾いて家庭音楽会をなさるといふ。一体、浅井さんの体の動きには何やら一定のリズムがある。寒暖計を振られる時とか歩かれる時とか。子供の頃からの音楽的環境がそれを形づくっているのではないかと思う。お父様の学究、いわば浅井さんの出生以前からの血の中の学究がリズムに乗って湧き出したようにも思われる。浅井さんの心のこまやかさ、誠実さもこのリズムの正確さの中にあるようである。私も今まで私の進退などについて幾度かお世話になった。どこまでも行届いていてまことに感謝に耐えない。今後ますます御自身の学問を発展されますよ